

亡夫の夢 五島産焼酎

長崎県五島列島北部、新上五島町の「五島灘酒造」が3月から、五島列島初の焼酎づくりを始めた。酒税法改正を受け、国が65年ぶりに焼酎製造への新規参入を認め実現した。原料の芋は町内の耕作放棄地を活用して生産した。ところが、旗振り役の前社長田本修一さんは1月、初仕込みを目前に56歳で急逝した。社長職を引き継いだ妻・喜美代さん(49)は「『焼酎で町おこしを』と願っていた夫の夢をかなえたい」と意気込む。(迫田修一)

初仕込み目前 1月急逝



田本修一さん (遺族提供)

中通島の山間部を通る県道沿いに、昨年10月完成した同社の焼酎工場があった。焼酎づくりは3月4日に始まったばかり。今は麴づくりの真っ最中で、甘い香りが辺りに漂う。島民の期待を感じる。飲んだ後にホッとすする優しい味に仕上げたい。真新しい蒸留器を見上げながら、杜氏の黒瀬弘康さん(48)が声を

弾ませた。初回の仕込みでは3キロの製造を予定。早ければ8月にも一本720ミリ、13000円前後で「五島列島教会群 祈りの島」「五つ星」の商品名で売られる。

黒瀬さんは、福岡県朝倉市の酒造会社「篠崎」の課長。20年以上酒づくりを携わった腕を見込まれて出向し、現場を指導している。「ブランド確立には最初が肝心。納得のいく味の完成まで出荷しません」と力を込めた。

妻「町おこし引き継ぐ」



焼酎工場の真新しい蒸留器を前に「夫の遺志をかなえたい」と誓う喜美代さん

65年ぶり参入実現

国は過当競争防止のため、焼酎製造への新規参入を認めなかったが、2006年1月の酒税法改正で「地元産の農産物を使用」「年間製造量100キロ以内」といった条件付きで認可。規制緩和を受け、同町で官民の推進組織「焼酎

を造ろう会」が発足。焼酎づくりの担い手を募集したところ、田本さんが手を挙げた。田本さんは建設会社を経営。その傍ら、荒廃が進む古里の田畑を心配し、6年前から自ら畑を耕しジャガイモなどを栽培していた。

そんな中で焼酎製造の話聞いた。「地元産の材料を使う条件なら農業振興につながる」と決意。五島灘酒造を昨年2月に設立し、鹿児島県の焼酎工場視察や資金集めなどに奔走した。病気が発覚したのは、製造免許取得を目前にした昨

年9月。入院を繰り返しながら、病床で「治してみせる」と復帰への意欲を語っていた。亡くなった1月9日の朝も体の痛みをこらえながら「運転資金が足りないから、何とかしなければ」と電子メールで長男・佳史さん(26)に伝えるなど執念を見せていた。

「万一の時、酒造会社はどうするの?」。ある日、喜美代さんは弱っていく夫に問いかけた。「自分としてはやってほしい」。田本さんは静かに答えた。

「他人に会社を譲ることも考えたが、その言葉を聞いて覚悟を決めた。今は夫が亡くなった悲しみに浸る時間もないほど大変ですが、絶対に成功させたい」と喜美代さんは語る。

佳史さんも建設会社を継ぐ一方、別の酒造会社で杜氏の修業を予定。遺志を受け継ぎ、良い酒を造ることで町に貢献したいと語る。

焼酎の原料のサツマイモ「黄金千貫」は地元農家12戸が約7畝もの耕作放棄地を耕し、収穫した。「農家も喜んでいきます。焼酎を町の新たな特産品としてPRしたい」と同町まちづくり推進課。問い合わせは五島灘酒造(0959・42・0002)へ。

「アル・カーイダは内紛状態」 ②
 亡夫の夢 五島産焼酎を実現 ③
 小説・唐十郎「朝顔男」 ③ 大きな字
 ④ CARS ④ ペット ⑥ 園芸 ⑦ あんしん ⑧ 芸能
 すぐ私流 齋藤由香さん ⑤